

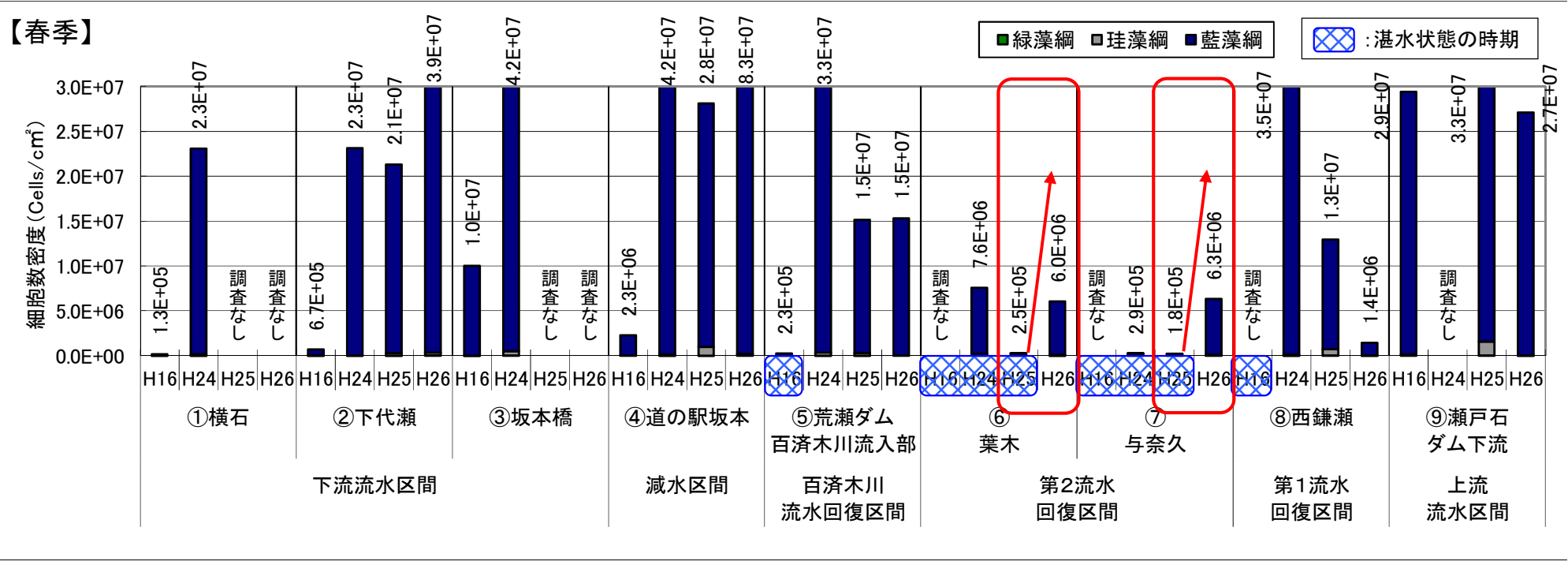
9) 付着藻類

【参考資料 I - 162 頁参照】

1 付着藻類

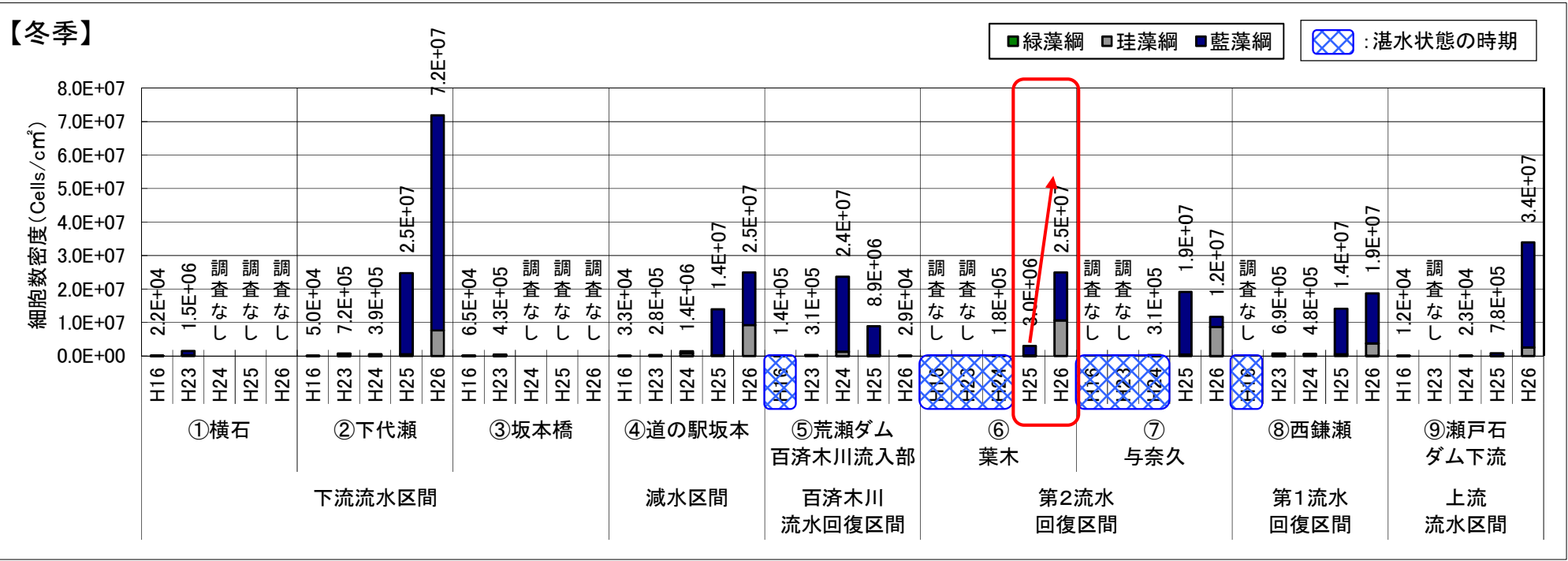
評価項目	視点	平成 26 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着藻類の細胞数密度	・「⑥葉木」では春季及び冬季に増加し、特に冬季には流水区間のレベルにまで達していた。特に藍藻綱が増加していた。 ・「⑦与奈久」は春季に増加していたが、冬季には少し減少し、珪藻綱の割合が高くなっていた。	・H26 年は、H25 年 6 月の水位低下装置の操作による第 2 流水回復区間の水位低下から 1～2 年を経過して流水環境に変化し、光合成を行う付着藻類の細胞数(特に、流水環境に多くアユの餌となる藍藻綱)が増加してきた。

付着藻類の細胞数密度



【用語の解説】

- ・藍藻綱：細胞の中にははっきりとした核のない原核生物であり、群体を形成し黒っぽく見えることが多い。流速が速く、石礫上に堆積物が少なく、アユによる摂食が盛んな箇所でも優占していることが多い。代表種として、*Homoeothrix janthina* (ホモエオスリックス・ヤンチナ) が挙げられる。
- ・珪藻綱：ガラスの成分である珪酸でできた殻を持ち、黄褐色に見えるのが特徴である。流速が比較的遅く、古い石の付着物が残る箇所でも多い傾向にある。代表例として、*Gomphonema* 属(クサビケイソウ属)が挙げられる。
- ・緑藻綱：細胞中に緑色の色素を多く含むことから、色鮮やかな緑色に見えるのが特徴である。この仲間の中には、大型糸状緑藻となって繁茂し、アユの餌となる藍藻や珪藻が付着する石を被うカワシオグサがある。



No.1

Homoeothrix janthina

分類：藍藻綱 ネンジュモ目 ヒゲモ科

注：写真は本業務で作成

分布状況

- ・淡水、付着性、低地から山地まで。流水に多く、湿岩上に生育することもある。汎布種。
- ・日本国内に広く分布する着生種。
- ・本邦河川の瀬における最も代表的優占種。

2 付着物

評価項目	視点	平成 26 年度の調査結果概要	評価概要
経年的な変化状況	付着物量	・有機物の割合は、「⑥葉木」と「⑦与奈久」では湛水状態の時期より高かった。 冬季には、その傾向を前年度から継続していた。 ・クロロフィル a は、春季よりも冬季が全体的に多いが、冬季の「⑥葉木」と「⑦与奈久」では湛水状態の時期より高かった。	・H26 年は、H25 年 6 月の水位低下装置の操作による第 2 流水回復区間の水位低下から 1～2 年を経過して流水環境に変化し、光合成を行う付着藻類が増加した結果、有機物の割合及びクロロフィル a も増加した。

付着藻類の付着量

